



1紙漉き文化再生プロジェクトメンバー（都城商業高校3年：上段左から木村夏蓮さん、清水鈴菜さん、廣川凜さん、岸良侑奈さん、内村美玲さん、三好瑠夏さん、陣之内さくらさん、下段左から津隈獅子空さん、鬼塚仁さん、藤岡佑成さん、内村心響さん）と池田さん（左上）、福田さん（右上）、北郷さん（右下）、2沖水川河川敷で自生する梶を初めて目にする、3小・中学生を対象としたワークショップを開催、4焼酎の廃棄物や花屋で廃棄される花、粉碎した廃棄ガラスを使用した和紙、5福田雅美さんから紙漉き技術を学ぶ、6昭和時代の紙漉きの様子

まちの記憶を未来につなぐ

題字：都城商業高校3年藤岡佑成さん（プロジェクトリーダー）

本市では、中心市街地の空き店舗解消などに加え、まちなかの賑わい創出のため、地域プロジェクトマネージャーの池田浩二さんがさまざまな取り組みを行っています。

今回は、高校生と連携した「紙漉き文化再生プロジェクト」を紹介します。

◎問い合わせ 秘書広報課 23-3174

紙漉き文化再生へ

市内でも特に紙漉きが盛んだった姫城地区の下長飯町。戦後に紙の需要が高まり、同町では一時期30軒もの紙漉きを営む家が立ち並びました。その後、機械化が進み大量生産が可能となったことで、手漉き和紙の需要は激減。昭和35年頃には同町のほとんどの紙漉き業が廃業し、その営みは途絶えてしまいました。

少ない資源を循環させて効率的に活用していく循環型社会への移行が求められる昨今。かつて市内で盛んだった紙漉きを文化として

再生させることは、廃棄物の再利用や新たな価値の創出につながる可能性もあります。そこで、池田さんと環境教育推進校に指定されている都城商業高校がタッグを組み、同校3年生11人をメンバーとする「紙漉き文化再生プロジェクト」が5月にスタートしました。

紙漉きを学び、触れる

紙漉きに関する情報が少ない中、メンバーはまず和紙の歴史文献を調査。また、県内唯一の紙漉き職人である福田雅美さんの協力を得て、その技術を学んだ。和紙をテーマに都城工業高校生がデザイン監修し、福田さんも携わった「ホテルTERASTA」の部屋を見学したりと、紙漉きや和紙を知って触れることからスタートしました。

フィールドワークやワークショップを实践

三股町の地域団体の協力の下、和紙の原料となる梶が沖水川河川敷に自生して

いるのを初めて目にしました。また、焼酎の製造過程で出る廃棄物を和紙に生かすため柳田酒造を訪問。同酒造代表と意見交換を行ったメンバーからは「芋の色や香りが残った和紙を焼酎ラベルにしたい」と提案も出ました。

紙漉きを広く知ってもらうため、メンバーと小・中学生で和紙のはがきを作るワークショップも開催しました。模様には、焼酎の廃棄物や花屋で廃棄される花、粉碎した廃棄ガラスなど、市内事業者から提供を受けた廃棄物を使用。実際に和紙を作るのはメンバー自身もこの時が初めてでした。プロジェクトのリーダーである藤岡佑成さんは「漉く時は少しでも傾けるとよれてしまうので、ずっと水平にしておくのが大変だった」と、手漉き和紙作りの難しさを感じました。

また、宮崎大学の谷田貝孝教授を講師に招いた商品開発検討会では「ランプシェードが作りたい」とメンバーから新たなアイデ

アも生まれました。12月20日(金)には、メンバーのアイデアを生かしたイベント「和紙あかReナイト」をMallmallまちなか広場で開催することが決定。瓶やろうそく、和紙のランプシェードに廃棄物などを再利用したランプの明かりが、まちなかを優しく照らし幻想的な世界を作ります。



未来のまちのために

池田さんの思いと高校生の若い力が共鳴し、試行錯誤を重ねながらも着実に歩みを進める本プロジェクト。リーダーの藤岡さんは「私たちが取り組んでいるのはまちの記憶を紡ぎ、未来につながる挑戦」と力強く語り、「いろいろな素材を活用し、途絶えた伝統産業を復活させたい」とメンバーの木村夏蓮さんも意気込みます。輝く瞳でまっすぐに未来を見据える彼らの挑戦は続きます。

まちの記憶は生徒の記憶にも残り未来につながる

環境教育を推進する本校の取り組みも生かせる本プロジェクト。池田さんをはじめ多くの人の協力により思いが少しずつ形になりつつあります。また、この活動の中で生徒たちが自ら提案したり、どうすれば伝わるかと考え、行動に移したりする姿を見て、

彼らの成長を感じています。

今回知ったまちの魅力や出会った人は生徒1人1人の記憶に残り、消えることはないでしょう。卒業しそれぞれの道に進みますが、この記憶が生徒とまちを今後もつなげてくれると思います。

池田 浩二さん
地域プロジェクトマネージャー



歴史や風土を見直すと見えてくる「まち」の魅力

「みんなが歩きたくなるまち」を目指し、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。重視しているのは「まちの記憶」です。どこのまちも同じような街並みが広がる中で、その土地の歴史や風土の中にこそ、まちの個性や住民の愛着につながるもの

が眠っていて、それがまちの価値や魅力に結び付くと考えています。

若い力で地域の文化の再生を目指す本取り組みが「まちの記憶」を継承し、地元の自然や産業との掛け合わせで都城の未来にどのような形で芽吹いていくのか楽しみです。



北郷 晶子さん
都城商業高校教諭
プロジェクト担当